



# 統合失調症を患う母とともに生きる子ども

## ～ゆりの日常～

お姫さま —16歳—(後編)



### 松岡園子

「え……うん、もうすぐ生まれる」

お母ちゃん、誰と話しているの？ 人って、1日でこんなにも変わってしまうものなんだろうか。夏子しかいない台所でささやくように話す声が、ゆりを3年前の台所に戻らせる。昨日、仕事から帰ってきた夏子の様子がおかしかった。夏子の職場の人からも、「仕事にならないので、帰ってもらいます」と電話があった。いつもはできていたことが、またできなくなってしまった。夜は2階で寝ているゆりだったが、2階にいても落ち着かない。布団を1階に移動させ、少しだけ横になったつもりが、朝まで寝てしまっていた。

「お母ちゃん、昨日、寝れた？」

パジャマのまま椅子に腰かけている夏子と目が合わない。またこの目……。前と同じ。時計を見ると、6時を過ぎたところだ。今日は日曜日だから、ゆりの仕事は休みだ。夏子の仕事も休みのはずだ。夏子はいつからここに座っていたんだろう。

「着替える？」

このまま放っておくと、夜まで座っているだけのような気がする。こういう夏子を見てみると、「軽い」と思う。存在が軽い。そこに居るようで居ない。ご飯を食べる、歯磨きをする、お風呂に入る、当たり前でできていたことが、声をかけないとできなくなっている。

「明日、仕事、休まんとあかんかな……」

明日の朝、何時ごろ電話を入れよう？ 月曜日の朝のベルトコンベアで、おかずを入れる人が1人少ないと、大変やろうなあ。でも、夏子を病院に連れて行かないと。

「それと、お母ちゃんの職場の人にも電話しとかんと」

夏子に聞こえるように言ったつもりだったが、反応はない。仕事が決まりそうだと話した時の、夏子のお姫さまみたいな瞳が思い浮かぶ。目の奥がつんとして、慌てて目を閉じる。せつかく仕事を教えてもらって、初めてひとりで仕事を始めた日に、こんなことになるなんて。明日、学校も休まんとあかんかな……。



「うーん、そうかあ」

先生は、夏子の血圧を測りながら大きくなずいた。

「先生、なんで、こんなことになるんですか」

ゆりは自分の口調がきつくなっているように感じた。

「ちゃんと薬も飲んどったのに」

先生はカルテに目を落とした後、夏子とゆりを交互に見た。

「薬も飲めとったんなら、ストレスがかかったからかもしれんなあ」

仕事は、自分が望んで始めたことだったのに？ そんなにストレスがかかるの？

「少し薬の量を調整し直してみよか。それで様子見てもらおうか」

いつ治まるんやろう。前は年3ほどかかった。また3年かかるの？

「治ってたのに」

「お母さんの病気は、独り言とか、症状がなくなったようにみえても、治ったわけじゃないよ」

わかっている、前に聞いた。毎日、脳に作用する薬を飲んでるから、それが抑えられてるだけ。

「ちょっとしたことで、再発することだってあるから、その都度うまく付き合っていないといけないね」

再発。そんな簡単な言葉で片付かないし、お母ちゃんだけは違うって思っていた。ゆりが病院の診察についてきたのが、珍しかったのか、受付の小窓からゆりが見えると、先生の奥さんがドアを開けて出てきた。

「吉田さん、お母さん、だいぶしんどそうね。大変ね」

こちらを見つめて話す奥さんの目を見ていると、それまでこらえていた気持ちが体の奥からこぼれそうになった。

「お薬ね、先生が少し調整しているけど、飲み方はいつも一緒ね。今はしんどいけど、ちょっとこれで様子見てね」

優しい口調もそうだけど、眼差しでいたわってくれているのがよくわかる。

「お母ちゃん、帰るよ」

夏子は壁の方を見て笑っている。声をかけてやっと動ける夏子が、子どもみたいに見える。やっぱり「軽い」。でも、全くそこにいないわけでもない。ゆりのいる空間と、夏子のいる空間は、繋がっているのだろうか。

「買い物して帰ろ」

帰ったら、ご飯を用意して、洗濯機をまわして……。家に着いて冷蔵庫を開けると、ピーマンの袋が転がっていた。輪ゴムで留められた袋に小さめのピーマンが2つ。一昨日の晩御飯は、お母ちゃんの得意なピーマンの肉詰めだった。

明日は仕事と学校、行けるかな。



うっすらと目を開けると、いつもと違う部屋の照明が目に入った。また 1 階で寝たんだ。台所から光がもれている。時計の針を見ると、もうすぐ 6 時になるところだ。ゆりは勢いよく起き上がった。今日は仕事に行けるか、夏子の様子を見て決めないと。台所につながる戸を開ける。

「おはよう」

「おはよう」

機械的な返事に聞こえる。でも、返事が返ってくるだけまし。薬も、いつもは自分でその日の分を用意できていたのに。テーブルの上には、クリニックでもらってきた薬袋がそのまま置かれている。お椀にインスタント味噌汁の具を入れる。夏子の視線を背中に感じる。こういう時、仕方ないと思っけていても、腹が立ってくることがある。ゆりの家は、夏子が英語を教える仕事をしていたから、おばあちゃんがご飯を作り、洗濯や掃除をしていた。ゆりが小学 6 年生の時に、おばあちゃんが亡くなった後も、夏子が代わってそれらをするわけではなかった。病気だから、できなくても仕方がなかったけれど。でも、子どもが親にご飯を用意して、親がそれを待っているって、おかしくない？ せめて一緒にするとか、ねぎらいの言葉をかけるとかしないのかと、期待ばかりしてしまう。仕事をしていると、気をまわして次の行動を読んで動くことが当たり前だと感じる。それは、仕事だからではなく、人として、周りの人が仕事をしやすいように手助けしたり、大変そうな人は手伝って、皆で仕事を終えるという共通の認識のように思う。誰かにそうしなさいと教わったわけではないけれど、それは人が持つ思いやりや、気配りなんだろうと思う。夏子はそうしたことが全くないように見える。調子が戻ってきても、人が大変そうな様子で隣にいても、その「大変そう」がわからないように見える。そこがお姫さまに見える。

「お薬まだやんね。飲んでいて。仕事、行ってくるから。しんどかったら寝といたら？」

夏子が薬を飲んだのを見てから、そう言って家を出た。お昼の薬は、電話を入れて飲むように伝えよう。夏子のことは心配だけれど、外に出て駅へ向かう自分の足が、1 歩ずつ軽くなっていくのがわかる。

さあ、仕事。

「昨日、休んでたやん、どうしたん？」

仕事場に着いてゆりがコンベアーの前に立つと、隣から加奈子さんの声がした。栄養士の加奈子さんが今日もコンベアーを手伝いに来ている。誰か休んでるのか、手が足りていないのかもしれない。

「お母ちゃんが、仕事始めたって言ってたやん、それが……」

「なんかあった？」

「急に前みたいに、調子悪くなって……」

『調子が悪い』という言葉だけで、他の人がどれぐらいのことをわかるんだろう。

「どうなってるんやろう」

「どんな感じなん？」

「声が聞こえてくるみたい、それが最優先になって、邪魔してくる感じ」

「邪魔されてるって、お母さんにはわかってるの？」

「ううん、わからんと思う」

「何もできないの？」

「トイレに行くこととか、ご飯をを食べることは自分でできる」

説明しながら、最低限のことはできるんや、と改めて思う。

「ご飯を作ったり、洗濯したり、掃除とかはできない」

「面倒なことが、できなくなってるんや」

加奈子さんが笑っているのが、声でわかる。

「私は、夫や子どもがいるから、そういうことをやってるけど、家事は好きじゃないし、できればやりたくないわ」

加奈子さんは、まだ笑っている。

「全部、忘れてしまったわけではないやん。お母さんも、ちょっと疲れたんと違う？」

「うーん」

こうやって話しているうちに、心の中の部屋が区分けされていくような気がする、ゆりの心一面に占めていた夏子が、仕事、仲間と話すこと、これからのこと、と仕切り直された部屋のひとつにすっと収まる。仕事が終わったら、学校にも行こう。そうしたらまた、心の中に学校の部屋だってできる。

家に帰ると、夏子の部屋に明かりががついていた。お昼も夜も、薬を飲むように外から電話を入れた。ちゃんと飲んであるだろうか？ ゆりが部屋の戸を開けると、パジャマ姿の夏子と目が合った。パジャマ、自分で着替えられたんや。

「おかえり」

あれ？ 夏子の目から小さな力を感じる。

「……ただいま」

夏子の目をよく見てみる。何か違う。

「お母さん、おかしかった？」

「え」

どうなっているの？

「お母ちゃんは……独りごとと言って、なんにもできんようになってたよ」

そんな説明で良いかわからないけれど、見えたように伝える。

「そうなの？」

夏子は考え込むような様子で、下を向いた。

「覚えてない？」

「うん。覚えてないわ……。なんか、しんどいから、もう寝るわね」

よくわからないけれど、ひとまず、なんとかなるかもしれない。台所のごみ箱のふたを開

けると、お昼、夜、寝る前の薬袋が入っている。飲めたみたい。台所を出たゆりは、2階への階段へ向かった。窓から月の光が差し込んで、階段の上が少し明るく見える。

「また、3年かかると思った……」

脳や心の中のことだから、よくわからない。外側から病気が見えなくなっても、病気が消えてしまったわけではない。お姫さまだって、これからも続くんだろう。でも、これがお母ちゃんなんだ。ゆりは最後の階段を上る足に力を込めた。

※この物語は実際の体験と、それを探求する虚構の物語をもとにしています。

実在の人物及び団体のプライバシーに配慮し、作中では架空の名称をあてています。